

白虎観会議前夜

— 後漢讖緯学の受容と展開 —

富 谷 至

【要約】 後漢光武帝が讖緯思想を援用することにより即位してから、讖緯は王朝一代を通して、中心的位置を確立する。小論は、光武帝位から章帝期の白虎観会議に至るまでの讖緯思想の受容と展開を、当時の政治史と関連づけて考察したものである。白虎観会議において、経学のみならず、緯学もその収束された姿を呈示するのであるが、会議に至るまでの讖緯思想の流れを概観する意味で、小論を「白虎観会議前夜」と題した。

史林 六三卷六号 一九八〇年一月

はじめに

西暦二五年の光武帝即位にはじまる後漢王朝は、明帝・章帝期にかけて一時期の安定と繁栄の時代を迎える。思想面、特に儒学においては、今文・古文の対立を内包しつつも経学全盛に向かい、後漢の礼教世界を現出しつつあった。皮錫瑞『経学歴史』は、前漢末から明帝・章帝にかけてを、「経学極世時代」と呼び、章帝期に完成をみる班固『漢書』は、この後漢礼教世界を色濃く反映したものにほかならない。かかる後漢の儒学史において、光武帝即位当初から、否それ以前の段階から、後漢期の儒学を特徴づけ、政治面にも強い影響力をもった思想が存在しつづけていたことは、やはり見過してはならないであろう。後漢儒学史を特徴づける思想、それは他ならぬ讖緯思想であった。今文・古文の論争と目されている白虎観会議、その議事録とも言える『白虎通』、経書鄭玄注などを見れば、讖緯思想の影響力の大きなこと、瞭然である。

る。当時、讖緯の学は、「外学」と称された経学に対し、「内学」とも言われたという。

ところでこの讖緯思想について、顧頡剛『秦漢的方士与儒生』^①をはじめ、最近における安居香山氏などの秀れた研究があるが、思想が後漢社会に与えた影響の大きさに比し、論考の量は決して多いとは言えない。小論で、光武帝即位から白虎觀會議に至るまでの讖緯思想の受容とその展開を考えてみたいと思う、それがまず最初の理由である。加えて、私が先に出した所謂「儒教の国教化」^②についての展望の責をここで負いたいと思う。儒教の国教化は、讖緯思想との密接な関係の上に考えるべきものであるとするのが西嶋定生・板野長八両氏の所説であったので。

ただ本稿では、讖緯思想と後漢初期の政治史の關係に比重がかかった結果、讖緯思想そのものの哲学的考察、および思想の起源については、十分に論及されていないことは、あらかじめ断わっておかねばならない。対象とする時期は、光武帝即位から章帝初年までであるが、そこにおいて王莽政権の歴史的意義、王莽の符命政治が与えた影響は無視できないであろう。しかし、それに対する言及も十分ではないこともことわっておきたい。

① 顧頡剛『秦漢的方士与儒生』（原題『漢代學術史略』この本の出版

経緯については小倉芳彦他訳『中国古代の學術と政治』解説等参照）

第二十一章「讖緯在東漢時的勢力」

② 安居香山『緯書の成立とその展開』（国書刊行会 一九七九） 安居

香山・中村璋八『緯書の基礎的研究』（国書刊行会 一九七六）

③ 拙稿『儒教の国教化』と『儒学の官学化』（『東洋史研究』三七―四 一九七九）

第一章 光武帝即位と讖緯学

「皇天上帝、后土神祇は、思いをめぐらされ、特に秀に眼をかけ命を下して人民を属ゆづね、人民の父母たらんとなされた。しかし秀は天のこの要望を辞退したのである。ところが臣下の諸侯の多くは、はからずも言を同じくしていう。『王莽が位を篡奪し、陛下は憤りを発し拳兵されました。王尋・王邑らを昆陽で破り、王郎・銅馬を河北にて誅伐し、天下を平定なされ、海内は陛下の恩恵にあづかることになり、上は天地の心にかない、下は人民の帰するところとなったのです』と。

又諷記には『劉秀、兵を發し不道を捕え、卯金、徳を修め天子たれ』とも言っている。私は再三再四辭退したのであるが、臣下は皆、『皇天の大命は躊躇なさつてはなりません』という。敬しんで受けないことが許されようか。』^①

右は西暦二五年六月、皇帝に即位した光武の祝文であり、後漢王朝はここに正式に始まる。しかし光武帝は皇帝位についたものの、天下平定の道はまだ遠かつたとしなければならぬ。祝文が出された同じ月に赤眉集団が天子に擁立した劉盆子をはじめ、各地に群雄が勢力を有していたのである。名実ともに王朝が安定に向かつて始動したのは、建武一二年（西暦三六）の公孫述政權打倒をまたねばならず、光武帝の初政は、王朝安定への試行錯誤の時期であつたと言つてよいであらう。

ところで光武は冒頭に挙げた祝文に諷記を引き、自己の即位を正統化しているが、彼が諷緯思想を信奉していたことは『隋書』経籍志に、

王莽、符命を好み、光武、図讖を以て興りて起り、遂に世に盛行す。

とあり、張翼は『廿二史劄記』、「光武信讖書」なる項目で、『後漢書』中にみえる光武帝と緯書との関連記事を詳細に挙げてゐる。又、顧頡剛『秦漢的方士与儒生』及び我が国に於ける安居香山『緯書の基礎的研究』などで、光武帝と諷緯思想の歴史的考察があり、この方面の研究は、少なくない。いま、これらの先学の業績をふまえつつ、光武帝と諷緯思想の関係をたどつていくことにしたい。

さて、光武帝の拳兵及び皇帝即位をめぐる、如何に緯書が深く関与していたのか、各所で言及している『後漢書』の中で、直接即位に関連したものとして、次の史料を挙げる事ができる。

(A) 光武先に長安に在りし時、同舍生強華、関中より『赤伏符』を奉じて曰く「劉秀兵を發し不道を捕え、四夷雲集し、龍は野に闕う。四七の際、火、主となれ」と。(光武帝紀)

(B) (王) 莽の末、百姓愁怨す。(李) 通もと(李) 守の讖を説き「劉氏復興し、李氏輔と為れ」と云うを聞き、私ひそかに常に之を懷

う。……光武、初め通、士君子の相い慕うるを以て、故に往きて之に蒼う。相見するに及び、共に語りて日を移し、手を握りて歛を極む。通、因りて具さに讖文の事を言う。光武、初め殊に意とせず、未だあえて之に当らず（李通伝）

(C) 王莽の末、光武嘗つて兄伯升及び（鄧）晨と俱に宛に之に之き、穰人蔡少公等と譚語す。少公頗る図讖を学び、劉秀まさに天子たるべきを言う。或もの曰く「是れ国師公劉秀たるか」と。光武戯れに曰く「何を用つて僕に非ざることを知れるや」と。坐する者、皆大いに笑うも、晨、心にひとり喜ぶ。（鄧晨伝）

ここに引かれた緯書が具体的に何であるかは、史料(A)に名が見える『河図赤伏符』の他は、定かでない。もっとも、平秀道氏は、鄧晨伝中にみえる讖言、「劉秀まさに天子たるべし」も、『宋書』符瑞志などの記事から『赤伏符』であると指摘されているが。

ところで、史料(B)及び(C)が語るように、光武帝は、はじめ讖緯思想に対して、あまり問題としなかったのであるが、それが即位時になると重要な地位を占めてくる。先に挙げた祝文中の「讖記曰劉秀発兵捕不道、卯金修徳為天子」が、史料(A)の「赤伏符曰、劉秀発兵捕不道、四夷雲集龍鬪野、四七之際、火為主」を踏まえていると考えておそらく誤りはないのであろう。そして即位後の光武帝の讖緯思想に対する接近度は、急激に増していくのである。当時、讖緯思想に批判的であった者たち、桓譚・劉興・尹敏らに対する光武の態度は、そのことを語つて余りある。

帝、桓譚に謂いて曰く「吾れ讖を以て之を決せんとす、何如」。譚、默然たること良久しくして、曰く「臣、讖を読まず」。帝その故を問う。譚また讖の経に非ざるを言う。帝、大いに怒りて曰く「桓譚、聖を非り、法を無す。將に下して之れを斬れ」と。（後漢書・桓譚伝）

ここにおいてもはや、接近は信奉にまで至つたと言つてよい。

讖緯思想に対する光武帝のかかる信奉は、一つには、光武に先だつ王莽政権が讖緯に連関する符命政治の上に立脚したものであったが為、王莽政権打倒のイデオロギーとして、やはり神秘的、予言的なものを利用せざるを得なかったからで

あろう。又別に、当時方士たちが先どりし、世論を反映した図讖が、劉氏復興を述べたものであったが為、光武帝は、当時の風潮に従い讖緯思想を延用した結果でもあろう。ただ、ここで観点をかえて指摘しておきたいのは、建武元年の光武帝即位後も、各地に自立し、天子と称していた群雄の中に、自立の思想的背景を光武と同じく図讖に求めていた者が多かったということである。

時に真定王劉揚、復た讖記を造作して云えらく「赤九の後、瘻揚、主と為れ」。楊、瘻を病み以て衆を惑わし、綿曼の賊と交通せんとす。(後漢書・耿純伝)

時に涿郡太守張豊、使者を執え兵を挙げて反す。自ら無上大將軍と称し、彭寵と兵を連ぬ。……初め豊、方術を好む。道士の「豊、まさに天子たるべし」と言うものあり、五綵囊裏石を以て豊の肘を繫ぎ、「石中、玉璽あり」と云う。豊、これを信じ遂に反す。(後漢書・祭遵伝)

初め(張)満、天地を祭祀し、自ら云う「王たるべし」と。既に執われ、欺じて曰く「讖文、我を誤てり」と。(後漢書・祭遵伝)

そして、蜀に自立し、最も強大な勢力を誇った公孫述も、この例にもれない。

(公孫)述、亦た好みて符命・鬼神・瑞応の事を為し、妄りに讖記を引く。以為ら^{おも}く、孔子、春秋を作し、赤制を為し十二公を断ず。漢、平帝に至る十二代、歴教尽くこと明らかなり。一姓、再び命を受くるを得ず。又た録運法を引きて曰く「昌帝を廃し公孫を立つ」。括地象に曰く「帝軒轅、命を受け、公孫氏握る」。援神契は曰く「西太守、卯金を乙す」。西方太守にして卯金を乙絶するの謂いなり、と。(後漢書・公孫述伝)

公孫述がここで引用している図書は、『河図録運法』『河図括地象』『孝經援神契』であり、それらの書にみえる「公孫」「西太守」を自己に結びつけたものである。くり返し、自己主張を内地にしつづける公孫述に対し、光武は書面で次の如く言う。「図讖で『公孫』と言っているのは宣帝のこと。(又別の図書には)『漢に代る者は当塗高』とあるが、君がどうして当塗高たり得よう。のみならず君は、手のひらの文様を瑞応などとしているが、王莽のまねをどうしてするのか。君は私にとって賊臣でも乱子でもない。にわか時にあつては、だれしも君事をしようとするもの。責めることはできない。

君はすでに年老いて、妻も弱っているのに、子はまだ幼ない。早くきちんとすべきである。天下は不可思議なもの、力でもって争ってもどうすることもできない。このことを、よく考えるべきである^③。そして最後に「公孫皇帝」と署名する。公孫述に与えたこの文面は、『華陽国志』に見えるそれとは、文辭が異なっているが、ここで図書にもとづいて自己を正統化しようとする公孫述に対し、光武帝も図書に異なった解釈をほどこし、又別の図書を引用し自身の正統化に努めていることは、特に注目したい。

いったい讖緯思想の上にたち自立している群雄に対し、光武自身の正統性を主張するには、彼らが立脚している讖緯思想そのものを非合理の名の下に否定するか、はた又、より説得性のある讖緯思想でもって対処せざるを得ないであろう。ただ当時、讖緯思想という形でもって劉氏復興となえる風潮があり、さらにそれが劉秀に集約されつつあった^④ことを考えれば、光武帝にとって後者の道、つまり図讖の信奉しか残されていなかったと言えよう。図讖でもって支持され成立し、他の群雄に優位性を主張しようとする劉秀光武帝において、自己の経済的基盤であった南陽豪族とともに、思想的基盤としての讖緯思想は、無視できなかったのである。かかる経緯に立つてみれば、図讖を非とする桓譚の立場は、情況をわきまえず、無理解も甚しい。「聖を非り、法を無みする」という光武帝の激怒も、当然のことであったと言える。即位後の光武帝の図讖への傾斜は、『後漢書』の各所に散見し、又先に挙げた『廿二史劄記』、『秦漢的方士与儒生』に詳しく論ぜられている。ここでは、行論の必要上、特に注目すべき二、三の事例を挙げておくことにしたい。

その一つは、即位後の任官、とりわけ大司空・大司馬など所謂三公の任官に際して、やはり緯書が延用されたということである。

世祖位につき、讖文を以て平狄將軍孫威を用いて、大司馬を行なわしむ。（後漢書・景丹伝）

『東觀記』によると、この讖文は、「孫威、狄を征す」なるものであったという。野王令王梁を大司空に任官する場合も、ことがらは同じい。

即位するに及び、議して大司空を選ぶ。赤伏符に曰く「王梁、衛に主たりて玄武と作る」と。帝、野王は衛の徙りし所、玄武は水神の名、司空は水土の官なるを以て、是に於いて擢びて梁を拜し大司空となし、武強侯に封ず。(後漢書・王梁伝)

ここで利用されている図讖、『赤伏符』が光武自身の即位にあたって重要な役割を果した『河図赤伏符』であることを、ここで指摘しておきたい。

又一つは、光武晩年に行なわれた封禪である。治政の完成を天に報告する儀式であるこの封禪が、多分に神秘的、呪術的要素を秘めているからであろうか、当然のこととしてそこに図讖が介在してくる。まず封禪をとり行なうきっかけとして、建武三十二年(中元元年)正月、泰山にて光武帝は夜に『河図会昌符』を読んで、そこに見える記事に啓発され、封禪の挙行に踏み切ることになったと、『統漢書』祭祀志には見え、また、挙行に際して梁松ら臣下に命じ、河図・洛書中の封禪についての記事を探し出させたともいう。結局、封禪の儀式は同年二月に行なわれたのであるが、それに当たって作らせた刻石文の中には、儀式挙行の根拠として、ここにも多くの緯書が引用されている。⑨それが『河図赤伏符』『河図会昌符』『河図合古篇』『河図提劉予』『洛書甄曜度』『孝經鉤命決』であったことも、先の任用に関して利用された『河図赤伏符』とともに留意しておく必要があろう。

中元元年十二月、それは光武帝が六二歳の生涯を閉じる前年であったが、ついに図讖を天下に宣布する。⑩図讖を国教の地位にまで引き上げたのであり、「図讖教国家」がここに成立するとするのが板野長八氏の所説である。

以後、明帝・章帝と続く後漢王朝において讖緯思想は政治史上、思想上無視できない影響力をもつに至る。明帝期に問題とされる礼楽の制定、章帝期の白虎観会議、鄭玄の経書注など、そこには讖緯思想が色濃く反映されている。

初め光武、讖を善くす。顯宗・肅宗に及び因りて焉を祖述す。中興より後、儒者争いて図讖を学ぶ。兼ねて復た附するに託言を以てす。(後漢書・張衡伝)

かかる讖緯思想の盛行、それは後漢一代を通じて流れつづけたものと言ってよいであろう。がしかし、光武期から白虎観

會議に至るまでに讖緯思想の隆盛にも、ある曲折、方向転換があったのではないかと思われる。

ここで目を、明帝末年の後漢政治史に向けることにしよう。

① 原文 皇天上帝、后土神祇、眷顧降命、屬秀黎元、為人父母、秀不敢當。羣下百辟、不謀同辭、咸曰、王莽篡位、秀發憤興兵、破王尋、王邑於昆陽、誅王郎、銅馬於河北、平定天下。海內蒙恩、上当天地之心、下為元元所婦。讖記曰、劉秀發兵捕不道、卯金修德為天子。秀猶固辭。至于再、至于三。羣下僉曰、皇天大命、不可稽留、敢不敬承。
(後漢書・光武帝紀)

② 平秀道「後漢光武帝と讖識」(『龍谷大學論集』三七九—一九六五)

③ 原文 讖言公孫、即宣帝也。代漢者當塗高。君豈高之身邪。乃復以掌文為端、王莽何足効乎。君非吾賊臣亂子、倉卒時人皆欲為君事耳、何足效也。君日月已逝、妻子弱小、當早為定計、可以無憂。天下神器、不可力爭、宜留三思。(後漢書・公孫述傳)

④ 『華陽國志』卷五 世祖報曰、西狩獲麟讖曰、乙子卯金、即未成授劉氏。非西方之守也。光廢皇帝、立子公孫。即霍光廢昌邑王、立孝宣帝也。黃帝姓公孫、自以土德、君所知也。漢家九百二十歲、以靈孫亡、受以丞相、其名當塗高。高豈君身耶。吾自繼祖而興、不称受命。求漢之斷莫過王莽。近張滿作患兵、困得之。歎曰、為天文所誤。恐君復誤也。
⑤ 安居香山「讖識の形成とその延用——光武革命前後を中心として——」(前掲『讖書の基礎的研究』所収)

⑥ 『後漢書』景丹傳、李賢注 東觀記載讖文曰、孫成征狄。

⑦ 『統漢書』祭祀志 三十二年正月、上齋、夜詭河圖會昌符、曰赤劉之九、會命岱宗。不慎克用、何益於承。誠善用之、姦偽不萌。感此文、乃詔松等復案河洛讖文言九世封禪事者。松等列奏、乃許焉。

⑧ 同右

⑨ 『統漢書』祭祀志 二月、上至奉高、遣侍御史与關台令史、将工先上山刻石。文曰、維建武三十有二年二月、皇帝東巡狩、至于岱宗、柴望秩於山川、班于群神、遂觀東后。從臣太尉憲、行司徒事特進高密侯禹等。漢資二王之後在位。孔子之後褒成侯、序在東后、蒼王十二、咸來助祭。河圖赤伏符曰、劉秀發兵捕不道、四夷雲集龍圖野、四七之際火為主。河圖會昌符曰、赤帝九世、巡省得中、治平則封、誠合帝道孔矩、則天文靈出、地祇瑞興、帝劉之九、會命岱宗、誠善用之、姦偽不萌。赤漢德興、九世會昌、巡岱皆當。天地扶九、崇經之常。漢大興之道在九世之王。封于泰山、刻石著祀、禪于梁父、退省考五。河圖合古篇曰、帝劉之秀、九名之世、帝行德、封刻政。河圖提劉子曰、九世之帝、方明聖、持衡拒、九州平、天下亨。洛書甄曜度曰、赤三德、昌九世、會修符、合帝際、勉刻封。孝經鈞命決曰、子誰行、赤劉用帝、三建孝、九會修、專茲竭行封岱青。河洛命后、經識所伝。……

⑩ 『後漢書』光武帝紀 (中元元年十一月)是歲、初起明堂、雲台、辟雍、及北郊兆域。宣布讖識於天下。

第二章 楚王英謀反事件

光武帝には、十一人の子があった。郭皇后の子だった東海恭王彊・沛猷王輔・濟南安王康・淮陽王延・中山簡王焉。光烈

皇后の生んだ明帝・東平憲王蒼・広陵思王荆・臨淮懷公衡・琅邪孝王京。そして許美人を母とする楚王英である。このうち臨淮懷公衡は夭折し、又東海恭王は明帝が即位して間もなく、永平元年に薨じた。この中でも晩年、黄老思想を好み、浮屠の齋戒や祭祀を行なった楚王英は、仏教の中国伝来を知る上で注目されてきた人物である。永平十三年、その彼が大逆不道という告発をうけ、丹陽涇県に徙され、そこで自殺するという事件が勃発する。『後漢書』光武十王列伝が語る事件のあらましは、次のようなものである。

(永平)十三年、男子燕広・英の漁陽王平・顔忠等と図書を造作し、逆謀有るを告ぐ。事下りて案驗す。有司奏すらく「英、姦猾を招聚し、図書を造作し、擅はしむに相い官秩もて、諸侯・王公・將軍・二千石を置く。大逆不道なり。請う之れを誅せんことを」。帝、親親を以て忍びず。乃ち、英を廢し、丹陽涇県に徙し、湯沐邑五百戸を賜う。……明年、英丹陽に徙り、自殺す。

事件の経緯は、『後漢紀』『統漢書』にも見えるが、楚王英が顔忠・王平らと結んで図書を捏造し謀反を企てたという点とで一致をみる。ただこの楚王英謀反の事は、英の自殺という点で落着いたわけではない。事件の後遺症が後々までも続いたのである。それに関係した者の追及はきわめて厳しく、阿附中傷、疑心暗鬼の状態の中で京師の親戚、諸侯、州郡の豪族、果ては事件を調査した官吏に至るまで、死罪や流罪に処せられた者、数千人にも達したという。

楚獄遂に累年に至り、其の辭語相い連なる。京師の親戚・諸侯・州郡の豪傑より考案の吏に及ぶまで、阿附し相い陥れ、死徙に坐する者、千を以て救う。(後漢書・武十子伝)

是の時、英の辭の連及し繋る所となる者、数千人。顯宗、怒ること甚し。吏これを案すること急にして、痛に迫り自ら誣す。死者甚だ衆し。(後漢書・袁安伝)

また、こういった事件は、楚王英だけに止まったわけではない。他の諸王のうち三人、淮陽王延、濟南安王康・広陵思王荆が図書捏造がもとで告発をうけ罪せられているのである。^②

この楚王英を中心とした諸王謀反事件については、既に東晋次氏がとり上げられ、「諸王謀反は、光武帝・明帝の法治

主義的皇帝一元支配に対する種々の階層の反発が諸王を通じて政治世界に浮上したものと解釈されている。^⑤ 確かに外戚・問同士の対立、明帝の功臣抑制政策などが諸王の謀反を準備していったと考えることも可能かも知れない。しかし、『後漢書』が語る諸王謀反事件は、その規模の大きさに對し、不明瞭な点が多いとせねばならない。『後漢書』は、各所で楚王英事件について言及し、そこから關係者数の多さが想像でき、「死徒に坐する者、千を以て數う」という記載も、あながち大げさなものではないのかも知れない。しかしながら事件がかくも大規模であり、事件關係者への追及がきびしさを極めたにもかかわらず、当の本人、楚王英に対する明帝の処置は、極めて寛容である。

帝、親親を以て忍びず。乃ち、英を廢し丹陽經県に徙す。（前出）

そして情況は、淮陽王・濟南安王の場合も同じである。

顯宗、延の罪の楚王英より輕きを以て、故に特に恩を加え、徙して阜陵王と為す。（後漢書・光武十王伝）

顯宗、親親の故を以て、その事を窮竟するに忍びず。（同右）

当事者には恩赦を施し、その周辺に對しては嚴酷を極めること、それは身内の者に対するひいきなのであろうか。又、そもそも、光武の諸王のうち、明帝在位期間には八人が残っていたわけであるが、楚王英を含めてその半数四名が、ほぼ同じ時期に、同じような告発をうけ罪せられているのである。この事實は、いったいどう解釈すればよいのか。明帝後半期、後漢の政治体制が一応の完成をみ、盛世期を迎えつつあったこの時期に、かくも大規模な事件が勃発した背景は、やはり積然としないものがあると言わねばならない。

ここで注目しておきたいことは、『後漢書』は諸王が図書捏造がもとで告発されたと述べるが、この図書捏造ということとは、すでに光武帝期に於いても桓譚・尹敏らにより、指摘されていたということである。

今、諸の巧慧・小才・技数の人、図書を増益し、讖記を矮称し、以て貧邪を欺惑し、人主を誑誤す。焉ぞこれを抑遠せざるべけんや。

（後漢書・桓譚伝）

(尹敏) 对えて曰く「讖書は聖人の作す所にあらず、その中に近鄙の別字多し。頗る世俗の辞に類し、恐らくは後生を疑誤せしめむ」。帝、納れず。敏その闕文によりて之れを増して曰く。「君に口なき(もの)漢の輔と為る」と。帝、見て之れを怪しみ、敏を召して其の故を問う。敏、对えて曰く、「臣、前人の図書を増損せしを見、敢えて自ら置らず、竊かに万一を幸う」と。帝、深くこれを非め、竟に罪せられずと雖も、亦たこれを以て沈滞す。(後漢書・儒林伝)

しかし、この時には、光武帝は図書造作に対してさほど問題にはしなかった。実際に図書造作をやつてのけた尹敏も、深く非難されはしたものの、罪には問われていない。しかるに、楚王英事件にあつては、明帝を中心とした後漢王朝は嚴罰で以て対処しているのである。たとえば薛漢。彼は少くして父業を伝え、とりわけ災異・讖緯の学に精通し、建武年間に博士となり、詔を受け図讖を校定した人物である。彼の下には、一時、数百人にもぼる門下生がいたが、楚王英事件に巻き込まれ、獄中に死亡すると誰も見向きもしなかった^④。ただひとり廉范だけが薛漢の遺体を収容したのであるが、それを知つた明帝の怒りは、誠にはげしい。

薛漢、楚王とともに謀り、天下を交乱す。范公、府掾なるも朝廷と心を同じくせず、かえつて罪人を収斂す。何ぞや。(後漢書・廉范伝)

図書が捏造され、衆人を惑すという理由で図書批判をした桓譚・尹敏らは、その批判の故に光武帝の激怒をかい、一方、図讖を学び博士となった薛漢は、図書に関与したが為に死後も、明帝に排斥されたのである。楚王英事件をはさんで、後漢王朝の図書造作に対する処置のこの相違にこそ、諸王謀反事件がかくも大規模になつたその理由を解明する鍵が密んでいるのではないだろうか^⑤。

光武帝の即位にはじまる後漢王朝が、思想的存立基盤を讖緯思想に求め、又求めざるを得なかつたことは、前章で明らかにした通りである。そして、讖緯政策は続く明帝にも受け継がれるわけであるが、この図讖というものは、桓譚らの指摘をまつまでもなく、その性格として拡大解釈が自由であり、増損を可能にする。公孫述は、「妄りに讖記を引いて」自

己の正統性を主張したのであり、他ならぬ後漢王朝も、図讖を十二分に利用し、自らの図讖革命を遂行したのであった。がしかし、かかる性格をもつ図讖は、王朝にとって諸刃の剣でもあったと言わねばならない。図讖が増損しやすいためである以上、そして増損された図讖が世論の支持をうけた場合、それは、いつ何時、劉漢王朝打倒のイデオロギーに転化するかわからない。光武帝・明帝と引きつがれてきた後漢王朝の図讖政策は、王朝自らの手で収束されねばならなかった。これ以上の図讖革命の進行に歯止めをせねばならなかったのである。その収束の機会を与えてくれたのが、楚王英、及び他の諸王の謀反事件であったのではないだろうか。

楚王英に代表される諸王謀反事件が、果して明帝らを中心として、でっち上げられたもの、冤罪であったか否か、もはやそれを解明する手がかりはない。しかし事件が後漢王朝の図讖政策の収束にその場を提供したことは、まちがいないからう。のみならず、讖緯思想の流れにも、それは少なからず変化を与えたのである。次章では、楚王英事件後の讖緯思想の援用のあり方について考察しよう。そして、その為には、まず、讖緯思想自体の分析がなされなければならない。

① 『後漢紀』卷十 男子燕広告英与顔忠、王平等造图書謀反。有司奏、英大逆不道、誅誅。上以至親不忍、徙丹陽溧县、湯沐邑五百戸。

〔広陵思王荆〕 其後使巫祭祀祝詛、有司举奏、誅誅之、荆自殺、立二十九年死。

② 『後漢書』光武十王伝 妖謀反、事竟、英自殺、忠等皆伏誅。

③ 東晋次「後漢初における皇帝支配と外戚・諸王」(『名古屋大学東洋史研究報告』3 一九七五)

〔淮陽王延〕 永平中、有上书告延与姪兄謝奔及姊館陶主婚騎馬都尉韓光招姦猾、作图讖、祠祭祝詛。事下案驗、光被殺、辞所連及死徙者甚衆。有司奏請誅延、頭宗以延罪薄於楚王英、故特加恩、徙為阜陵王、食二県。

④ 『後漢書』儒林伝 薛漢字公子、淮陽人也。世習韓詩、父子以章句著名。漢少伝父業、尤善説災異讖緯、教授常数百人。建武初、為博士、受詔校定图讖。……後坐楚事辞相連、下獄死。

〔濟南安王康〕 康在國不循法度、交通賓客。其後、人上书告康招来州郡姦猾漁陽顔忠、劉子産等、又多遣其緝帛、案国書、謀讖不軌。事下考、有司举奏之、頭宗以親親故、不忍窮竟其事。

⑤ なお西嶋定生氏も、『中国の歴史』2、「秦漢帝國」(講談社 一九七四)でこの楚王英事件をとり掲げ、讖緯思想と結びつけて考えられている。ただ氏の解釈は「図讖の尊重が、一方で楚王英の疑獄事件を引きおこし、他方で白虎観会議において経義を説くのに讖書の説が用いられることが当然のこととなった」(四三二頁)ということに止

まる。

第三章 讖緯学の展開と白虎観会議

私は本稿に於いて、讖緯を表わずに「凶讖」ともいい、又「緯書」「凶書」などとも述べ、表記は必ずしも一定したものではなかった。事実、これまで挙げてきた例をとっても明かなように、『後漢書』自体の表記も統一がとれているとは言い難い。ただ蔽密に言うならば、内容面、成立の過程などからみて、「讖」と「緯」とは区別せねばならない。すでに『隋書』経籍志には

孔子既に六経を叙し、以て天人之道を明らかにす。後世その意を稽同する能わざるを知り、故に緯及び讖を立て、以て来世に遺す。其の書は、前漢より出で、河図九篇、洛書六篇有り。黄帝より周文王に至りて受くる所の本文と云う。又別に三十篇有り、初め起りてより孔子に至るまで、九聖の増演する所、以て其の意を広むと云う。又七経緯三十六篇あり、並びに孔子の作す所と云う。前と合して八十一篇となす。

とあり、「緯」と「讖」は区別がなされている。安居香山氏の指摘によれば、緯書は天文占的讖の如き未来予言書、及び歴史事象と直接かかわり合いがあるものの「讖」と、「経書」に対する「緯書」、釈義釈経的な「緯」に区別できるといふ。そのうち、「讖」は「河図」・「洛書」の名を借りたものが多く、前漢初期、侯星家・方士などが形成、伝達したものであり、一方「緯」は、「春秋」「詩」などの経書名をもつ所謂「七経緯」と呼ばれるもので、前漢中半期から後漢期にかけて、公羊学に代表される齐学系の学者、つまり今文学家が立説形成に深く関与したということである。

もっともこの「讖」と「緯」の区別、「河図」「洛書」と「七経緯」の相違は、『後漢書』中にも見られないわけではない。たとえば、方術伝の樊英の条には

（樊英）又、風角・星算・河洛・七緯を善くす。

と、「河洛七緯」なる並記区分した表現が見られる。順帝期、讖緯思想を非難した張衡の上奏文には、言を前に立て、徴を後に有す。故に智者これを貴ぶ。之れを讖書と謂う。（後漢書・張衡伝）とあり、また桓譚『新論』啓語篇には、

讖は河図洛書より出ず。但だ兆眚あるも知るべからず。後人妄りにまた加増、依託し、是れ孔丘なりと称す。誤の甚しきなり。

との非難がみえる。張衡、桓譚の言にみえる「讖」が、嚴密な意味での「讖」かどうかはさておき、「河図」「洛書」の類が未来予言の書と考えられていたことは、これより確認できるであろう。ただ安居氏も指摘されるように、未来予言的要素の濃い「河図」「洛書」と釈義釈經的な「七経緯」について、両者の名称の相違が、そのまま完全に内容における区別でもあるかという点、必ずしもそうではないことは言いそえておかねばならない。「河洛書」と「七経緯」の間には、同名のものが若干あり、又内容の面でも類似性がみられる。「讖」と「緯」、「河図」「洛書」と「七経緯」はあくまで名称上の区別であり、内容面での区別は、名称とは別に考えねばならないのである。

かかる相違に留意して、光武初年からの讖緯学の流れをいまいちど概観してみることしよう。なお、以後本稿で使用する「讖」「緯」なる用語は、引用史料に見えるものを除いて、狭義の意味で使用していきたい。

光武即位から封禅にかけて、数々の図書が援用され、そこに見えるものが『河図赤伏符』『河図録運法』『河図括地象』『孝経援神経』『河図会昌符』『河図合古篇』『河図提劉予』『洛書甄曜度』『孝経鉤命決』などであったことは、既に指摘しておいた。ここにおいて、それぞれの名称を冠して利用された図書は、讖・緯の区分を考えたいま、所謂讖書が主であったと言うことができる。そして、その内容も史事にかかわり合う未来予言的なものが多い。

光武帝期にあって、援用される図書はかく、河図・洛書の讖類が中心であったが、『後漢書』を通してみた場合、時代を降るにつれ七経緯が、河洛書よりも目についてくる。順帝期、張衡は図書の具体名を挙げ非難するが、その時にやり玉にあがったのは、緯類の書、『春秋讖』『詩緯』『春秋元命包』であり河洛書は、問題にもされていない。光武初期にか

くまで重用された河図・洛書は『後漢書』中、明帝期以降ほとんど表面にはでてこない。少くとも、具体名を挙げて、ほとんど引用されることはないのである。

章帝建初四年、諸儒を白虎觀に集め、五經の同異を議論させた白虎觀會議に於いて、多くの図書が引用されていることは、これまで折りにふれ述べてきたのであるが、ここで『白虎通』本文に名を挙げて引用されている図書と、その引用のされ方を以下に列記しよう。

- (1) 天子者爵称也。爵所以称天子何、王者父天母地、為天之子也、故援神契曰、天覆地載、謂之天子、上法斗極、鉤命決曰、天子爵称也。
- (2) 爵有五等以法五行也。或三等者法三光也。或法五行何、……含文嘉曰、股爵三等、周爵五等、各有宜也。
- (3) 父在称世子何。繫于君也。……父歿称子某何、屈于尸柩也。……中侯曰廐考立筮、為太子。
- (4) 帝王者何、号也。……号言為帝何、帝者諦也、象可象也。王者往也、天下所歸往也。鉤命決曰三皇步、五皇趨、三王馳、五伯驚。
- (5) 歲再祭之何、春求秋報之義也。故月令、仲春之月、命民社、仲秋之月、挾元曰命民社。援神契曰仲春祈穀、仲秋獲千、報社祭稷。
- (6) 冬至所以休兵不舉事、閉關商旅不行、何。此曰陽氣微弱、王者承天理物。……故孝經識曰夏至陰氣始動、冬至陽氣始萌。
- (7) 諸侯之臣諱、不從得去何。以屈尊卑孤惡君也。……援神契曰三諫待放、復三年愴惓也。所以言放者、臣為君諱、若言有罪放之也、所諫事已行者、遂去不留、凡待放者、冀君用其言耳、事已行、災咎將至、無為留之。
- (8) 含文嘉曰、天子射熊、諸侯射麋、大夫射虎豹、士射鹿豕。天子所以射能何、……
- (9) 古者所以年十五入太學何、……論語識曰五帝立師、三王制之。……
- (10) 天所以有災變何、所以譴告人君、覺悟其行、欲令悔過信德深思慮也。援神契曰行有点欠氣逆于天情、感變出以戒人也。
- (11) 災異何謂也、春秋潛潭巴曰災之言傷也、隋事而誅、異之言怪也。……樂稽耀嘉曰禹將受位、天意大變。
- (12) 王者受命、以改朔何、明易姓示不相襲也。春秋瑞應傳曰敬受瑞應而王改正朔易服也。
- (13) 三綱者何謂也、謂君臣父子夫婦也。……故含文嘉曰君為臣綱、父為子綱、夫為妻綱、又曰昆弟有親、師長有尊、朋友有旧。

(14) 樂。稽。耀。嘉。曰、顔回尚三教、變虞夏如何、曰教者追捕敗政、摩弊溷濁、謂之治、舜之承堯、無為易也。
性所以五、情所以六何、……

樂動。聲。儀。曰、官有六府、人有五藏。

(16) 五藏者何、謂肝心肺腎脾也。……故元命苞曰、目者肝之使、肝者木之精、蒼龍之位也。鼻者肺之使、肺者金之精、制割立斷、耳者心之候、心者火之精、上為張星、陰者腎之亨、腎者水之精、上為虛危、口者脾之門戶、脾者土之精、上為北斗、主變化。

(17) 始起先月太初、然後有太始、形兆既成、名曰太素、……故乾鑿度云太初者氣之始也、太始者形之始也、太素者質之始也、陽唱陰和、男行女隨也。

(18) 天左施、日月五星右行何、……含文嘉曰計日月右行、刑德放日月東行也、

(19) 日之為言突也、常滿有節、……援神契日月三日而成魄、三月而成時、

(20) 月有閏余何、……故識日閏者陽之余、

封樹者、可以為識。……含文嘉曰天子墳高三仞、樹以松、諸侯半之、樹以柏、大夫八尺、樹以欒、士四尺、樹以槐、庶人無墳、樹以楊柳、

(21) 王者所以祭天何、……故易乾鑿度云三王之郊、一用夏正也。

若干の疎漏があるかも知れないが、ここに見える図書は、例(20)を除き、緯書・七經緯、『孝經援神契』『孝經鉤命決』『礼含文嘉』『尚書中侯』『孝經識』『論語識』『春秋潛潭巴』『樂稽耀嘉』『春秋瑞応伝』『樂動声儀』『春秋元命苞』『易乾鑿度』等々である。そしてその内容は、經文に対する釈義積経的なものが多い。そもそも、五經の異同を是正する為に設けられたのが白虎観会議であることから、そこに引かれている図書の内容も釈義積経的なものにかたよるのは当然かも知れない。しかし、同じ図書である河図・洛書の類が皆無であることには、少しく疑問を感じざるを得ない。光武帝期、天下に宣布した図識には、緯書・識書がともに含まれ、河図・洛書と七經緯は同じ扱いを受けていたはずである。加うるに、白虎観会議に見られる、図書で五經の異説を正すことは、すでに明帝の初年に行なわれている。

永平元年、(樊憺) 長水校尉を拜す。公卿と郊祠、礼儀を雑定し、讖記を以て五経の異説を正す。(後漢書・樊憺伝)

『後漢書集解』所引の蘇輿説によれば、経と緯の混合は、ここから始まるということであるが、永平元年のこの五経校定が、前々年中元元年の「図讖を天下に宣布」した延長線上にある行為とみれば、ここで言う「讖記」は光武帝期に採用された図書、つまり河図・洛書及び七経緯であったといえる。以上の点をとってみても、『白虎通』が引く図書に、河洛書が皆無であることに、疑問が残り、そこに何らかの理由があったとしなければならぬのである。

しからば、光武帝期にあっては同等であった讖と緯、河図・洛書と七経緯が、白虎会議あたりから讖よりも緯により比重がかかり、図書といえは七経緯が中心的地位を占めるようになったその原因は、何に求めればよいのであろうか。私は、第二章でとり上げた明帝末年の諸王謀反事件が、この讖・緯のバランスに大きく影響を与えたと、考えたい。

楚王英に代表される諸王謀反事件は、後漢王朝がその図讖政策を収束する絶好の機会であったこと、前章ですでに述べた。未来予言的な河図・洛書に基づいてなされた光武帝の図讖革命は、一応この時点でその進行に歯止めがかけられたのである。また、ここで、讖緯思想にもその自由な活動にたがはめられた。諸王謀反事件という洗礼をうけた後において、もはやそれ以前の河図・洛書といった神秘的、未来予言的な要素の濃い讖を利用することはできなくなった、そして以後、讖緯思想自身、その変改をせまられ、経書名を頭にいだく緯へと、援用の面で、比重が移っていったのではないだろうか。④
讖緯思想を援用する者は、実質的内容は同じであっても、形式的には七経緯の名をもつ緯書を利用の対象とするようになったと言えないだろうか。同じ図書であっても、やはり緯書は経書名を冠し、経書の権威の下にあったので。また、河図・洛書が多分に革命的ニュアンスを含んでいるのに比し、緯書は、内容はさておき名称上、解釈を旨とする釈経書であったが為に。

諸王謀反事件を経た後、図書は緯書が主に利用されるようになり、白虎観会議において、讖緯思想は緯を中心として自己の立場を再めて確立したのであり、その端的な例が『白虎通』にみえる緯書引用であった。

七経緯以外の図書が、以後どのように扱われていたのか、『後漢書』等の史料は、それを語るに雄弁ではない。ただし時代は下るが次に掲げる記事は注目してよいであろう。

靈帝から献帝にかけて、関東の兵が反乱をおこし、難を避けんとする董卓は遷都を提案する。

高祖、関中に都して十有一世、光武、洛陽に宮して今に於けるまで、亦た十世なり。石包（塞）讖を案するに、宜しく都を長安に徙し以て天人の意に応ずべしとあり。（後漢書・楊震伝）

この董卓の提案に対し、楊彪は反対意見を出して次のように言う。

石包室讖は、妖邪の書、豈に信じ用いる可けんや。（後漢書・楊震伝）

楊彪は楊賜の子であり、また楊震からつづく楊氏一族の未裔である。『後漢書』楊彪伝の冒頭には「彪、字は文先、少くして家学を伝える」とあり、この家学とは楊震からはじまる楊氏一族の学であり、直接的には父賜の学であった。ところで『後漢書』楊賜伝には、賜の上奏文が多くみえ、そこには経書とともに緯書が少なからず引用されている。つまり楊彪にあっては讖緯学も彼の学の一つであったと言ってさしつかえない。とするならば、その子彪が学んだものうちに緯書が含まれていたと考えてよいであろう。かく緯書を肯定すべき立場の楊彪にあって、『石包室讖』は否定さるべき図書であった。当時において、図書の区分は厳然としてあり、七経緯以外の図書は、「妖書」として排斥されていたことがわかる。

以上、本章では、明帝末年の諸王謀反事件を契機として、讖緯思想の中で、讖から緯へその援用の比重が傾いてきたことを述べてきた。そして讖緯思想が七経緯の名の下に改めて集積し、新たな姿を示したのが、白虎観会議であった。

① 安居香山「讖緯思想研究上の諸問題」（『讖書の基礎的研究』前掲）

同氏「讖書の成立とその展開」（前掲）

② この他に讖緯思想の起源についての論者は、狩野直喜『兩漢学術考』

（筑摩書房 一九六四）、杉本忠「讖緯説の起源及び発達」（『史

学 13—2, 4 一九三四）などがある。

② 安居氏前掲書

③ 『後漢書』張衡伝（張衡以図緯虚妄、非聖人之法、乃上疏曰、臣

聞聖人明審律歷以定吉凶、重之以筮、雜之以九宮、經天驗道、本原

於此。(中略) 尚書堯使詔理洪水、九載績用不成、皀則殛死、禹乃嗣興。而春秋諷云、共工理水。凡讖皆云黃帝伐蚩尤、而詩讖獨以為蚩尤敗、然後堯受命。春秋元命包中有公輸班与墨翟、事見戰國、非春秋時也。又言別有益州。益州之置、在於漢世。其名三輔諸陵、世教可知。

至於國中諱于成帝。一卷之書、互異敘事、聖人之言、孰無若是、殆必虛偽之徒、以要世取資。往者侍中賈逵摘讖互異三十余事、諸言讖者皆不能說。至於王莽篡位、漢世大禍、八十篇何為不戒。則知圖讖成於哀平之際也。且河洛、六藝、篇錄已定、後人皮傳、無所容竄。

④ ここで若干注目しておきたいことは、光武初年、光武帝即位に際して利用された図書のうち、七經緯に含まれる孝経緯のみが河洛書と同等に扱われ、援用されているということである。吉川忠夫「六朝時代における『孝経』の受容」(『古代文化』19—4 一九六七)、「六朝時代における『孝経』の受容・再説」(『古代文化』27—7 一九七五)によれば、『孝経』は、六朝時代に於いては、一種宗教的呪術力を賦

おわりに

本稿は、章帝初年に行なわれた白虎觀會議に至るまでの讖緯思想の流れを、光武・明帝期の政治史と結びつけて考察したものである。

所謂図讖革命でもって成立した後漢王朝は、光武帝の時代にあつて、図讖を天下に宣布し、「国教」といえる地位にまでひきあげる。続く明帝期にあつても、この方針は継続していくのであるが、讖緯思想の発展と展開は、明帝末年の収束を経なければならなかつたのである。楚王英に代表される諸王が、図書造作を理由に弾圧された事件は、図書援用のあり方に少なからざる変化を与えた。光武帝期にあつては、河図・洛書と七經緯は同じ図書として、同等の地位を占めていたのが、以後、図書の中心的なもの七經緯へと移っていく。「讖」と「緯」に区分される讖緯思想は、形式的な面で「緯」

与された經典として扱われていたということである。吉川氏は、道教・仏教との関連に於いて、『孝経』を位置づけられており、又、時代は、本稿がとり扱う時期よりも下るのではあるが、『孝経』の呪術性ということより見れば、神秘的・予言的な河洛書と孝経緯が、光武の初年に於いて、神秘的・呪術的という紐帯で以て結びついたと考えることもできる。

⑤ たえば、光和元年に起つた異変について楊賜の書面の一部には、次の如き緯書の引用が見える。

臣聞之經伝、或得神以昌、或得神以亡、國家休明、則鑒其德、邪辟昏亂、則視其禍。今殿前之氣、心為虹蜺、皆妖邪所生、不正之象、詩人所謂蠖蠖者也。於中孚經曰、蜺之比、無德以色親。方今内多變倖、外任小臣、上下並怨、訕譏盈路、是以災異屢見、前後丁寧。今復投蜺、可謂執矣。案春秋讖曰、天投蜺、天下怨、海内亂。加四百之期、亦復垂及。

に集約していったのである。そして光武期の図書援用とは異なり、讖緯思想の第二段階の発展を示すものが、白虎観会議であるといえる。『白虎通』に引用されている七経緯は、その立場に於いて「経」と何ら異ならない。いわば、後漢王朝に於ける讖緯思想の発展は、光武期の初期段階をへて、自己の存立基盤をよりいっそう確乎たるものにしたと言ってもよい。

ところで最近、西嶋定生・板野長八氏は、「儒教の国教化」を考える上で、凶讖のかかり合いを重視されている。両氏の見解は「儒教国教化」の成定期において若干の相違があるものの、凶讖が儒教の中に包摂されてはじめて「国教化」が成立する点で一致をみる。^① 経学の地位の確立とは別に、儒教の国教化という観点にたつならば、両氏の見解の如く凶讖は無視できないかも知れない。とするならば、凶讖がその確乎たる地位を確立する時期、板野氏の言葉をかりれば、「経であり、経なるもの、孔子にかかわるもの」となる時期は、後漢王朝がその讖緯政策の総括を行なった後、つまり白虎観会議の時期に求める方がよいのではないだろうか。「儒教の国教化」が名実とも成立するのは、白虎観会議に於いてであったと私は考えている。

① 西嶋・板野両説については、拙稿『『儒教の国教化』と『経学の官学化』』参照。

portance of the latter from the viewpoint of securing sources of revenue. And according to them there are different forms of receipt and supply, which for its part determines the form of storage.

Therefore we should grasp this system overall, taking these relations among agencies into consideration.

The Eve of *Congress in Pai-hu-kuan* 白虎觀會議：
the Reception and Evolution of *Study of the Ch'ên-wei* 讖緯思想 in *East Han* 後漢

Itaru Tomiya

Since *Emperor Kuang-wu* 光武帝 ascended the throne by invoking *Study of the Ch'ên-wei*, it had been a leading principle in politics throughout his reign.

In this article, relating to the political situation, I consider the reception and evolution of *Study of the Ch'ên-wei* at the time of period— from the enthronement of *Emperor Kuang-wu* to the opening of *Congress in Pai-hu-kuan*. The point of my consideration is to survey the trends of *Study of the Ch'ên-wei* on the eve of *Congress in Pai-hu-kuan*, where not only *Study of Confucian classics* 經学 but also *Study of mystical Confucianist belief* 讖学 showed us a highly sophisticated figure.